【 4 】

氏　名	生　沢　雅　夫（いくざわ まさお）
学位の種類	文　学　博　士
学位記番号	論文博第 75 号
学位授与の日付	昭和 47 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学位論文題目	**知能発達の基本構造**
論文調査委員	（主査）教授 園原太郎　教授 野田又夫　教授 池田義祐

論文内容の要旨

本論文は知能測定に基づく発達研究を主として方法論的観点から検討し，知能の発達的変化の様相を明らかにするには，ビネー式知能検査やその延長上にある乳幼児発達検査の構成上の長所を生かして潜在クラス分析を適用するのが合理的であるとし，尨大な検査資料をこの方法で解析し，乳児から15,6歳に至るまでの知能の発達に極めて安定した段階区分を検出するのに成功した研究である。

著者はビネ検査の構成原理とその歴史的変遷，この種の検査法による横断的縦断的諸研究を審さに検討している。ビネの知能検査はその構成原理から，夫々の問題の特質を十分考慮するならば知能発達の経過について重要な情報をもたらすものであるにもかかわらず，測定尺度として尺度論的に整備されてくるうちに，合成得点が MA や IQ として表示され，数多い発達研究でもこれによる分析が主となった。勿論各年齢毎の問題について因子分析による研究も少なくないが，その結果は，分析法の不統一，被験者群への考慮の不備のため区々である。且各年齢水準で別々に抽出された一般因子が相互に等しいかどうかは不明であった。又異なる年齢間の IQ の相関即ち検査—再検査相関の因子分析についての研究も夥しいが，変化の時期については明らかでないといえる。著者は IQ の検査—再検査相関は結局合格問題数の相関であり，合格問題数は一般因子の近似的な因子評点とみなされるから，ビネ検査の IQ の検査—再検査相関は各年齢毎の検査問題の一般因子評点の相関と近似的に等しいと考えられるとし，一方 IQ の標準偏差に年齢的な変動のあることに注目し，この両者を統合して発達的変化のおこる時期を検出する方法を提案し，過去における代表的な追跡的研究を点検して，4,5,6 歳ごろと 9,10,11 歳ごろとに変化点のあることを指摘する。しかし合成得点による解析は限界をもち，ビネ検査のもつ情報を十分生かすのは広い範囲の問題を用い，広い年齢層に亘って，その潜在構造を探索することにあるとする。

著者が試みた潜在構造分析は潜在クラスモデルによる分析である。その資料は (1) 3 歳—7 歳，1,080 名のビネ検査結果　(2) 6 歳～15歳のビネ検査の追跡的資料延 2,313 名　(3)生後41日から 3 歳児までの乳児発達検査 2,150 名で，この資料は他から提供されたものである。検査の時期が異なるため 3 種の資料は別個

に分析された。分析の計算は著者がプログラムした Green 解によっている。

潜在クラスモデルをこの種の資料に適用したのは，著者が初めてであったが，極めてよく適合し，被験者の折半，問題のぬきとり，年齢層の極端なかたより等によって偶然性のチエックを行なったけれども，何れに於いても分析結果は変らなかった。3歳までに少なくとも4段階の，3歳から7歳までの間に3段階の，6歳から15歳までの間には5段階の発達段階が区分され，これらは Piaget の発達段階と対比したとき，かなりよく整合しているといえた。

論文審査の結果の要旨

発達における質的変化を予想する段階区分は，発達研究の基本的課題の一つであり，従来も諸家によって様々な区分原理と時期とが提案されてきた。近時これを客観的な手法によって明確にしようという試みが起ってきたのであるが，その多くは因子分析法の模索的適用であり，著者が本論文においても詳しく検討していう如く，技法的にも不確実であり，結果的にも曖昧である。著者がビネ知能検査の構成原理を新らしい視点で再評価し，この検査法のもつ情報を十分に生かす方法として潜在クラス分析を重視し，これを適用して極めて安定した段階区分に成功したのは，決して偶然ではなく知能発達に対する深い洞察と，分析技法の基本への透徹があったからである。勿論，潜在クラスモデルの根本前提が機能の発達連関と如何に理論的に融和するかの問題は残っている。しかしモデルの適用はその適合性が事実に於いて示される場合，一応成功とみられるべきであろう。数多い諸研究に対する独自の創意的な批判とともに，発達研究に新らしい基盤をもたらした本研究の成果は，高く評価されるべきである。

よって，本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。